
『いぬかい動物病院の事情』

雑

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

『いぬかい動物病院の事情』

【コード】

N0983Q

【作者名】

雑

【あらすじ】

獣医と助手の賢と光（こひ）は従兄弟同士。ふたりが大事（だいじ）にしているのが猫の愛（まな）。愛の異変でとんでもないことに（笑）

Love cat

「けっ…けんちゃん！」勢いよく俺の部屋のドアを開け、光が飛び込んできた。

「…zzz。」こういう時は無視に限る。

「ちよっ！なんで無視なん！？起きてるでしょ！？」バシバシの俺の布団を叩く光。

「るっせーんだよ！大した用事もねえくせに。それと犬飼先生と呼べと何度も…。」いつもの説教をしようとする…

「でも、オレだって同じ名字だし…って！そんなことより愛が…。」光がいつになく緊迫した表情を浮かべる。

「愛がどうした？…まあお腹でも壊したか。」やれやれとベットから立ち上がると…

「ひっ…人になったんだよっ！」俺にすぎる様に光が叫ぶ。

「…は？」「だ、か、ら！人間になったんだってば！」更に大声で喚く光。

「…。お前さ…、そりゃ漫画の読みすぎじゃねえの？」「マジで引いた。

「違っつて！とにかく来て！」光が俺の冷たい視線にも動じず、俺の腕を無理矢理引く張る。

愛とは、この犬飼動物病院で飼っているメス猫で、気が強いくせに、忠実なところもある変わった性格をしている。それでも可愛いと思っってしまう俺はよっぼど飼い主バカだろう。

「愛ー？」愛のお気に入り毛布を持ち上げると、そこには猫耳と尻尾の生えた少女が寝息をたてて寝ていた。

「ほら！嘘じゃない。」威張った様に言う光。

「…。光…ちよっ顔貸せ…。」目は少女から離さず言う。

「ん？」

バコッ

光が顔を俺に向けた瞬間思いっきり殴る。

「ったー！何で殴るの？」光が涙目で訴える。

「あゝやっぱり夢じゃないか。」うんうんとうなずきながら腕を組む。

「オレを無視しないで、けんちゃん！」赤くなつた頬を擦りながら言う光。

そうこうしてるうちに少女が目を覚ました。目を擦りながら、俺たちの方を向く。

「え、えーっと…愛…？」光が遠慮がちに確かめる様に聞く。

「…！」尻尾と耳が立ち、少女の表情が明るくなった。

「服がいるな。」とりあえずオレのワイシャツを着せたが、ずっとこのままというわけにもいかない。愛は嬉しそうにシャツの匂いを嗅いでいるが。「なんで？愛はなんでも似合うから、サイズは大きなくても賢ちゃんの服でいいじゃん。明日オレの服持ってこようか？賢ちゃんよりサイズは小さいし。」のんきな発言をする光。

「バツカ。このままほつといてみる。ムラムラすんだろ。…あ、いやその…。」思わず言わなくて良いことを口走ってしまう。

「…。村々って何？」光が首を傾げる。

「……。」

物心つく前から一緒に育つた従兄弟だが、光がバカでよかつたと初めて思つた瞬間だった。

「よし、行ってこい！」光を押し出す様に玄関まで連れて行く。
「ちよつ！だ、だから何でオレ！？」なんとか逃れようと光が暴れる。

「お前女に間違われたことあんだろ？だから！…そうそう下着も忘れずにな。」この際理由なんてどうだっていい。自分で行かないで済むなら。

「それは昔の話だし…しつ下着とかよくわかんないし…とにかくやだ！」反抗的な目で俺を見てくる光。

「ふう…仕方ないな。」溜め息をつき、携帯を取り出す。

「諦めて違う人に頼むの？」光がぱあつと明るい表情になる。

「いいから、ちよつと黙ってる。」光を黙らせる。

「おっひさあくケンケン連絡ありがとー！」出会い頭に抱きつかれ、ちよつと引く。

「お、おう。久しぶり朱鳥^{あずか}。いいから、離れる。あとケンケン言うな。」言いながらくつついている朱鳥を剥がす。

「やあん。冷たいんだからあ。」残念そうな目をする朱鳥。

「あ、の…？」おずおずと会話に入ろうとする光。

「ああ、こいつ朱鳥。高校の同級でな…こいつに任せておけば平気だから。」面倒くさいことこの上ない。

朱鳥は赤茶の髪で襟元の開いた白いブラウスに黒のショートパンツに真っ黒なニーハイブーツをはいていた。美人だが、ただの美人じゃない。

「この子が光ちゃん？かつわいー！！」朱鳥が抱きつこうとしたのをさりげなく光が避ける。

「…えっ？え、…え？」光がいろいろ聞きたげに朱鳥と俺を見る。

どうやら光もなんとなく違和感を抱いた様だ。

「言つとくが、朱鳥は男だぞ。」早口で言う。

「ちがーう！ニューハーフだってあ！」プリプリと朱鳥が怒る。

「ええ！？…あ、あの、この人に任せると何を…。」朱鳥を怯えた様に見る光。

「怖い？大丈夫よう。優しくしてあげるからん。」朱鳥がウインクをする。

「…っ。」

光の助けを求める様な視線を感じたが、気づかない振りをした。

f r e e d o m (前書き)

朱鳥ワールド炸裂です

freedom

「まっ…まだ…ですか？」光がもぞもぞと身動きをする。

「まあだ！…もうっせっかちさんねえ。」朱鳥が手を止めずに言う。

「…はあ。」

（ついでいけない。）光は心の中で思った。

光は朱鳥に診察室の隣の休憩室に強引に連れ込まれ、化粧されていた。朱鳥の勢いに抵抗しても無駄だと悟った光は大人しくされるがままになつていたので。

（悪い人ではないけど…。）と考えていたが、

「できたわよん。」という朱鳥の声で我に返る。

「服はっ…と。」自分で持ってきた荷物をゴソゴソと探す朱鳥。

どうやら女装させて女物の服やらを買いに行かせる気らしいことに、やっと気づいた光。

（けんちゃんのアンポンタン！）心の中で叫ぶ。

「コレなんかどう？…かわいいでしょ？」ズイツと自慢気に朱鳥が出したのは露出度の高いミニスカートだった。

「オレ、男なんですけど…。」分かつているとは思うが、改めて主張する光。

「クスツ…やあね、冗談よお。」朱鳥は笑うが、さっきは冗談という感じはしなかった。

「あ、こっち！こっちは！？」という朱鳥に対し、どうせ着せられるだから、もうどうでもいいという気持ちで、

「いいんじゃないですか？。」と、ろくに見ずに投げやりな返事をした光。

朱鳥が勧めてくれたのは、意外にも普通の白いチュニツクだった。

「まあメイクもナチュラルにしたからね。これなら光ちゃんは今はいてるジーパンでも合うし。…本当はレギンスかトレンカを合わせたいケド…？」変な期待の目を向けられ、

「…あ、じゃあこれ借ります！」と慌てて話を切り換える光。
「じゃあアタシ賢のどこいるわねえ。」ヒラヒラと手を振って、休憩室を後にする朱鳥。

「んで…こうなった、と。」コーヒを啜りながら俺が言うと、恥ずかしいのか俯く光。

「何かもつと無いの！？かわいいよとか、せめて似合うよくらい…。」

「光の隣で朱鳥が反論する。」

「別に。てか、似合うとか似合わないとかの問題じゃないだろ？」

（何を言い出すんだ、このオカマは。）と白々しい目を向けると、

「なんか今失礼なこと思った！？」とさらに声を大きくする朱鳥。

「とりあえず…行ってきます。」釈然としない顔で光が家を出ようとす。

「あーさっさと行ってこい。このヒステリーがうるさいから。」頬杖をつく振りをして軽く耳を塞ぐ。

「だ、れ、が！ヒステリーだあ！！」地声の低い声で朱鳥が叫ぶ。

「自覚ねえの？…末期だな。」ふうと溜め息をつく。

そんなやりとりを耳にしながら、ただただやりきれない気持ちでいっぱいになった。

freedom(後書き)

賢と朱鳥の過去も書きたいなあなんて思ってます！ヒロインは愛のつもりですが、この話では蚊帳の外ですね(汗)

↳ c o n f e s s (前書き)

少しだけ賢と朱鳥の過去に触れています。ほとんど賢のモノローグですが。

「あーこうしていると、高校の時に戻ったみたいねえ。」朱鳥が椅子に座ったまま、伸びをする。

「…そうだな。まあ歳はくつたが。」あまり興味なさそうに賢が同意する。

「もおそれ言わないでよ！」抗議する朱鳥。

「事実だろ？」煙草をくわえ、ライターを手探りで探し、火を着ける。

高校の頃の俺は所謂『優等生』。出来ることを妬む奴らに、陳腐な言葉で褒めてくる先公。…もう何もかもうんざりだった。屋上でなんとなく時間を潰す日々が続いた。

そんなある日。

「あ、人！？匿って！」屋上のドアが勢いよく開いて、長い髪を金に染め、化粧した朱鳥が飛び込んで来た。これが朱鳥との出会いだった。

「お前生徒指導の先公に追いかけてたんだっけ？…インパクトのある出会いだったよな。」色んな意味でという言葉はどうか飲み込んだ。

「あら！？やあだ、そんなにかわいかったかしら？」朱鳥が赤面する。

「……そうじゃなく、驚いたっか、引いたし。」どうしてこうも自分の都合の良いように解釈できるのか不思議だ。

「…アタ…オレ…さ、賢に会えて嬉しかったよ？」朱鳥が地声で呟く。

「え？」急に改まられ、訳が解らないでいると、

「皆オレのこと落ちこぼれとか、オカマとか決めてかかって、ちやんと見てくれた人っていなかったんだ。だから賢がこうして普通に接してくれることでオレがどれだけ救われたか。」俺の顔を真っ直ぐ見て微笑む朱鳥。

「…あつそ。」気のない素振りを装ったつもりが、照れて目が泳いでしまう。

「それと…。」と少し躊躇し、下を向く朱鳥。

「？」

「それと…オレ…！」朱鳥が決心した様に顔を上げる。

「オレ？」

「や、やつぱ、いい！かつ帰る！」明らかに動揺した様子で、バタバタと帰ろうとする朱鳥。

その背中に、

「なあ、朱鳥。」と声をかける。ビクツと朱鳥の肩が震えた。

「俺…気づいてたよ、高校の時から…でも、ごめん。」友達として傍にいたことは出来ても、朱鳥の気持ちに伝えてやることは出来ない。

「やつやくね、賢だったら！バレバレだったってこと？」涙声の朱鳥が少しだけ振り向いた。

「賢、やつぱり言わせて？」震える声を抑える様に朱鳥が言う。

「ああ、聞いてやる。」子守唄を歌う様に優しく言い、目を瞑る。

「大好き。」

「サンキュ。」

キミはボクにとっても、大切な存在だから誠意を持って応えよう。キミにせめてものありがとう。

melancholy

あの頃の自分とは言えば…。

「ひなた！、このねこのケガみてくれ！」ケガをしたノラを、馴染みの動物病院に連れて行く。小さい頃の俺の日課だった。

「ああ？まだ診察時間前だけど。ていうか、毎度毎度ノラ連れてくんな。慈善事業でやってるわけじゃねえし、アタシは、診察前でもやることはあんだよ。」忌々し気にひなたが言うが、心からではないことを知ってる。

「じぜんじぎょー？」きよとんとする。

「純粹に動物たちの為思ってやってるわけじゃない。商売なんだよ、商売。アタシはそんな優しくない。」言いつつも、手早く傷を消毒し、包帯を巻いてくれるひなた。

「でも…いつもノラみてくれんじゃん。」ノラだってきちんと診察してくれる。ひなたは優しいのに…。

「ガキはいいんだよ。細かいこと気にしなくて。」ひなたにコツンとゲンコされた。

犬飼ひなた。光の姉で、俺の従姉。光の面倒を見ながら獣医をやっていた。女性で、しかも若い人が中々いない獣医師会の中で一目置かれた存在だった。全ては過去のことだが…。

「…ひなた、こうは平気？」光はあまり外へ出なかつたので、外へ連れ出すのは俺の役目だった。

「ああ…昨日の夜中高熱出してな…。今朝も熱は下がったけど、寝てるって言ったんだ。でも賢が来るから起きてるって聞かなくて、さっきぶっ倒れたよ。」溜め息まじりにひなたが言う。

「おみまいしたらダメ？」ひなたの様子からすると大したことは無

さそうだが、心配になる。

「ここにいるも邪魔なだけだ。行ってやれ。」そっけなくひなたは言うが、嬉しそうだ。

「ごうー？」小声で呼びながらドアを開ける。

「ひなねえ？…あ、けんちゃん！」少しだるそうな様子だが、身体を起こし、笑顔を見せる光。

「ん。げんき…ではないみたいだな…だいじょうぶか？」無理に笑っている感じが、余計心配にさせた。

「へいきだよ。ただひなねえがねてる…って…。」息苦しそうに光。「オレがいしやならびょうきをなおしてやれるのに…。」そしたら

ひなたにもあんな表情かおさせない。グツと唇を噛む。

「おいしゃさん？けんちゃんか？」光が目を真ん丸にする。

「おかしいか？」笑われると思い、恥ずかしくなった。

「おかしくないよ。ただ、けんちゃんはいつも『だれかのために』なんだって。」光が嬉しそうに言う。

「バ、バカ！そんなんじゃないよ。ほんとうはひなたに…。」口ごもる。

「ひなねえがどうしたの？」首をかしげる光。

「なっなんでもない！」

会えると楽しくて、会えない日は苦しい…こんな気持ちは初めてだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0983q/>

『いぬかい動物病院の事情』

2011年6月1日19時55分発行